

高等学校国語科における主体的・対話的で深い学びの実践

佐藤 泰大
教科領域コース

1 テーマ設定の理由

平成 30 年に告示された学習指導要領では、改訂の基本方針の一つとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が明記された。¹⁾ これを受けて実際の教育現場でもこの「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善が行われている。しかし、依然として講義調の伝達型授業に偏っていたり、また学習活動を子供の自主性だけに委ね学習成果につながっていないかという現状もある。特に大学受験等と直結する高等学校の学習ではそれが顕著である。そこで、私の専門教科である国語で「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業構想を行い、それを高等学校で実践したものを考察する。そうすることで実際に「主体的・対話的で深い学び」を教育現場で実現するために必要な要素や課題が発見できると考え、このテーマを設定した。

2 実践で扱う題材と実践の概要

題材は第一学習社『高等学校 改定版 標準古典 B』中の、歴史物語『大鏡』の一部、『弓争ひ』である。²⁾ この『大鏡』は、二人の老人が藤原道長の栄華から衰退までを藤原氏の人物同士の関係を交えながら語っている様子を記したものである。そして扱う『弓争ひ』はその一部であるため、登場人物同士の関係や当時の時代背景などを押さえずには理解が難しい。また、敬語表現が頻出しており、語り手である老人が誰に対して敬意を払っているのかについても理解できなくてはならない。そのことから、この単元ではまずこの『大鏡』が書かれた時代背景とともに、登場する藤原氏の人物同士の関係を理解させる。その上でこの『弓争ひ』について学習を進めていくこととした。この『弓争ひ』では、藤原道長が、身分が上である甥の藤原伊周に弓の勝負に付度なく勝ってしまうという部分が描かれており、その際の登場人物の表情などが明確に描かれているのが特徴である。この題材をもとに授業を考える際、文法という知識のみに留まらず、文章の読解、解釈を行うための問いを設け、問いに対して対話等の活動を取り入れることで「主体的・対話的で深い学び」の実現を図った。

3 実践の考察

考察は授業中の生徒の発言や様子、授業で使用したノートなどから総合的に行った。文法事項に関しては、板書を主に用いて理解を図った。板書事項を記入できるよう本文を写したプリントも用意した。助動詞を四角で囲んだり、助詞を丸で囲んだりなどの板書事項を写せるようにし、さらに後日見直しがしやすいような板書を意識した。その結果、授業中文法事項に関する質問をしても答えられる生徒が多く見られ、理解している様子が見られた。しかし、板書では示しきれない事項に関してはパワーポイントを用いたが、それに関してはノートのメモ欄に書く生徒とそうでない生徒

がいた。学習者の書き漏れを防ぐためにもノートの書き方の指定を行うべきであった。

また学習で重要視していた登場人物の様子や表情等を本文から導く活動に関しては、生徒が自分の考えを示した部分は見られず、どの生徒もノートに同じような記載の仕方をしている事が机間巡視の際見られた。このことからほとんどの生徒が該当部分について、教師の板書を写すのみに留まっていることが分かった。文法事項を押さえることが中心となってしまう、文章の読解、解釈についての理解が疎かになってしまっていたということが窺える。最終時に行った藤原道長と藤原伊周の比較に関しても、単元で最も重要な学習であるにも関わらず、多くの生徒が戸惑う様子が窺えた。この原因としてワークシートの問いの立て方が抽象的であったということが挙げられる。活動の内容や流れをワークシート上に示すことで改善できたと考える。文章を読解、解釈するためには問いの立て方が重要であることが分かる。同じ題材を授業化する際、様々な問いを採用しどれが生徒の学習に有効か今後検証していきたい。

4 今後の展望

主体的・対話的で深い学びを達成するための授業構想を行い、その授業の実践を経て得た成果を踏まえ、今後の展望を述べる。

まず国語科の文法中心の授業手法からの脱却について述べる。今回の実践では文法が中心の授業展開になり、文章の読解、解釈について考える時間があまりとれなかった。その結果として主体的・対話的で深い学びを生徒が得ることができなかったのではないかと考える。今後古文の授業を行う場合、深い学びを実現するために文章の読解、解釈につながる問いを立て、その問いについて対話等の活動を通して考えられるような展開をしていく。特に今回扱った『弓争ひ』のように登場人物の様子を捉える際、グループ活動でロールプレイを行い、生徒自身がそれぞれの登場人物を演じることで文中の人物の感情を捉えやすくなる考えられるため、採用しどのような効果があるのか検証したい。

次に、授業において ICT 機器の活用について述べる。今回の実践で用いた ICT ツールとしてはパワーポイント資料をモニターに映すのみに留まった。それ以外にもクイズ作成ツールを用いて、授業の導入で古文単語の確認を行うことができたり、文法に関して学習をした後に練習問題をタブレット端末に送ったりということができ、様々な利点が生まれることが予想される。ICT 機器の活用で、文章の読解、解釈に時間を多く使うことが可能であるため、積極的に活用していきたい。

最後に生徒の実態把握について述べる。高等学校は学校によって学習者の能力差が大きい。担当する学習者の能力を把握し、その能力にあった学習を提供していくために、授業中だけでなく授業外での様子も観察をし、授業を作成していく。また、文字を読むことに困難を抱えていたり、色の識別に困難を抱えていたりする生徒を担当する可能性もあるため、授業の形式的な部分だけでなく、板書の色使いの工夫やワークシートの工夫など、学習のユニバーサルデザイン化も併せて図りたい。

参考文献

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説』2018 年 東洋館出版社 p 3
- 2) 伊藤 春樹・富永 一登ほか 8 名 『高等学校 改訂版 標準古典 B』平成 30 年度改訂 第一学習社